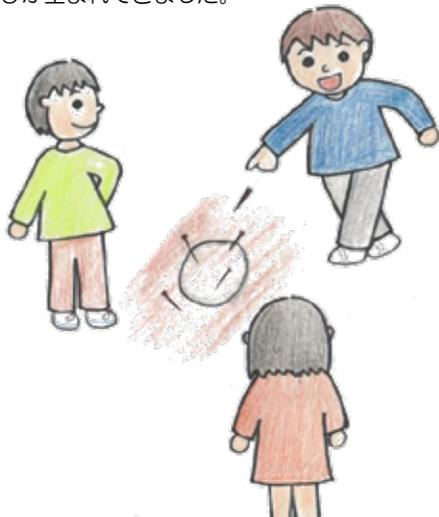


なげて遊ぶ

当てたりぶつかけたり うまくキャッチしたり

投げるという行為は、狩猟の技術として早くから発達した、人間の生存にとって重要な技術で、そこからたくさんのお遊びが生まれてきました。



いろいろな伝承あそび

22 釘差し（釘刺し）

比較的土のやわらかい場所で、主に5寸釘（約15cm）を使って遊ぶ。釘を投げて地面に刺さっている相手の釘を倒すというメンコのようなあそび方もあれば、前に刺さっていた場所と次に刺した場所との間に直線を引き、それで相手の進路をふさぎつつ、より早くゴールを目指すというあそびもあった。いかにも危険そうに見えるあそびで、見かけることは少なくなったが、実はプレイパーク（冒険あそび場）では、現在でも大変人気のあるあそびである。大正時代くらいまでは、先を尖らせた木の棒を使って遊んでいた。
【検索：釘打ち、金釘打ち、釘投げ、釘立て、ねっき、ねっくぎ】

23 水切り（石切り）

水面に向かって石を投げ、石を跳ねさせるあそび。石選びが肝心で、少し小さめで平たい円盤状の石を探す。中央部がふくらんでいるような石が良い。低い姿勢をとってサイドスローで投げると、水面をはうようにとんでいく（こともある）。ギネス記録は88回（その後、それを超える回数が申請中）。

24 投げ竹（竹がえし）

長さ20cm、幅2cmほどの竹べらを数本まとめて握り、投げ上げたり回転させたりするあそび。握った竹べらを立て、床をトンと突きながら体の前で半回転させてキャッチする技をリズムカルにくりかえすあそびや、投げ上げた竹べらを手の甲でキャッチし、すべてを裏か表にそろえて落とすあそびなどが代表的なものだが、地方によってさまざまな遊び方があった。竹は加工が簡単であるため、道具の竹べらは自作することが多かったが、駄菓子屋で購入することも可能だった。駄菓子屋で買えるほど、ポピュラーなあそびであったともいえる。

【検索：竹べらあそび、竹おとし、竹なんご、六歌仙】

25 チェーリング

80年代に流行したあそび。チェーリングというプラスチック製でカラフルなおもちゃが駄菓子屋などで売られており、それで輪っかを作って飾りにしたり、おはじきのようにはじいたりして遊んだ。1つの輪に7つくらいリングを通してひとつの玉にして、お手玉のように投げたりキャッチしたりするあそびも盛んにおこなわれた。自転車のスポークに取り付けて、チャラチャラ音をたてるのも流行った。



26 輪投げ

的をめぐけて輪を投げるあそびで、西洋では蹄鉄投げというあそびや、船員がデッキでロープ製の輪を投げるあそびとしてひろまった。日本には明治期に伝わったとされるが、自分たちで道具を作って遊ぶようなことは少なく、おもに縁日で景品めあてのあそびとして多くの人に記憶されている。的に当てるあそび（射的）のなかで、投げる行為によるものは、輪投げのほかには縄投げ、フライングディスク（frisbee）、投扇興などがある。

27 プーメラン

プーメランは世界各地で狩猟の道具として使われてきた。その中でも投げた後で手元に帰ってくるタイプのものが有名。日本では50年代後半から70年代前半にかけて、プラスチック製の玩具が駄菓子屋で売られ、紙製プーメランが雑誌の付録についてくるなど、男の子にとって人気のあそびとなった。ただ、一向に戻ってこないプーメランを、せせせと捨いに行くことも多かった。



お手玉

上手いしないと、もっとやりたくなる

日本の伝承あそびには、お手玉をはじめとして祖父母から孫へと伝えられる隔世伝承あそびがたくさんあります。あそびを通して礼儀や作法などを伝え、人格を育てるといふ、大切な役割も持っていました。



<遊び方>

振り技（ゆり玉）

片手または両手を使い、複数のお手玉を連続して投げ上げる。常に1つ以上のお手玉が空中にある。

28 両手二つゆり



①両手にお手玉を持ち、右手のお手玉を頭より高く上げる。



②お手玉が上がっている間に、左手のお手玉を右手に持ち替える。



③左手でお手玉を受けると同時に、右手で投げ上げ、これをくりかえす。

拾い技（よせ玉）

お手玉5個を使い、ひとつは親玉、のこりの4つは子玉として使う。

29 おひとつおひとつ



①子玉4個を下に置き、親玉を右手に持って投げ上げる。右手（または左手）だけを使う。



②その間に子玉を右手で1個拾い上げ、落ちてくる親玉を右手で受け止める。



③拾った子玉を下に落として、親玉を投げ上げる間に、次の子玉を拾う。

30 おつかみ



①親玉を右手に持ち、子玉4個を下に置く。右手のお手玉を頭より高く投げる。



②親玉が空中にある間に右手で子玉を1個拾い、左手で持つ。



③それをくりかえし、子玉を全部左手に集める。

31 あんたがたどこさ



①数人で輪をつくり、あんたがたどこさを歌いながら、各自で両手二つゆりをする。



②歌詞の「さ」の部分で、右手のお手玉を左隣の人に届くように投げ上げる。



③右隣からとんできたお手玉を右手で受け止めて、また両手二つゆりをつづける。

あそびの
雑学

お手玉の歴史と中身

お手玉と同様のあそびは世界各地にあり、長い歴史をもっています。紀元前の時代から、地中海の周辺地域で羊の距骨（かかとの骨）を使ったあそびがあり、これがお手玉の原型とされています。拾い技（よせ技）のようなあそびであったようで、ヨーロッパでも近年まで遊ばれていました。そのあそびがシルクロードを経由してアジアに伝えられると、小石を使ったあそびに変容し、それが中国から日本に伝わったと言われています。江戸時代になって布のお手玉が登場してから、現在のようなあそびになっていきました。

布のお手玉となってから、いろいろなものが中身として使われてきました。あずき、だいず、じゅず玉などが代表的なものであり、沖縄では貝殻などが使われることもありました。それぞれの家庭で、家にある布を使い、握りやすい大きさや形、重さを考えた自前のお手玉を作って遊んでいました。現在市販されているお手玉の中身には、プラスチック製の丸いベレットが多く使われています。

【検索：おじゃみ、ジャグリング、石なご】



てんか

全国いたる所にあったこの呼び名。
でも中身はいろいろ、という不思議なあそび！

「てんか」や「テンカ」、あるいは「天下」と呼ばれるあそびは、広い範囲で遊ばれていたようですが、中身は地方によってかなり違っていました。共通点はボールあそびであることくらい。昭和の後半の頃に、各地で流行ったあそびでした。

32 てんか<1対1で遊ぶパターン>

ある程度距離を離れて向かい合い、両足を肩幅かそれよりもやや広く開いて立つ。バレーボールやドッチボール大のボールを用意し、両手で持って両足の間からアンダースローで投げる。キャッチできたら、攻守交代。キャッチし損ねたら負け。片手キャッチやクロスキャッチなどの技によって、投げる位置が有利になったりポイントがついたりする。



33 てんか<集団で遊ぶパターン>

1人がボールを高く投げ上げ、3回バウンドするのを待って誰かがボールを取る。捕った者がオニ（シューター）となってゲーム開始。オニは3歩だけ歩くことができ、誰かにボールを当てる（5歩という地域も）。当てられた人は、アウトとなっていったんゲームから抜ける。当てられた人は、一定の条件で復活が可能（地域差大）。ボールをキャッチされると、オニが交代となり、最後のひとりになったら終了。

34 天大中小

全国的に「天大中小」「大学落とし」などと呼ばれているボールゲームを「天下」と呼んでいた地域もある。投げるあそびというよりは、打つあそびである。地面に「田」の字のラインを引き、それぞれのエリアに「天」「大」「中」「小」とかく。各エリアに1人ずつ入り、ドッチボールなどを使って相手の陣地にボールを打ち込み、ラリーを続ける。ミスをしたら、一ランク下に格落ちする。



【検索】 テンカ、天下、股投げ、天下落とし、大学落とし、大学、四点



あそびとニュースポーツ

多くのスポーツは、あそびをそのルーツとし、長い時間をかけてさまざまに変化し発展してきました。そうした競技スポーツとは別に、20世紀後半以降、生涯スポーツという考え方が広がる中で、身近なあそびに競技性を加えたようなスポーツも多く生まれてきました。それらはニュースポーツと呼ばれ、レクリエーション活動にとりいれられたり、体づくりにも活用されたりすることが多くなっています。またニュースポーツには、競技として確立しているスポーツにふたたびあそびの要素をふんだんに注入したものの、という性格もあり、あそびとスポーツの境界が明確なものではなく、行ったり来たりできるものとなっています。

たとえば日本レクリエーション協会では、子どもや高齢者の運動機能の低下への対策として、吉本興業などと協力して、「てんか」をもとにした「スポーツテンカ」を開発し、その普及をはかっています。その他、ニュースポーツと呼ばれるものの中には、公式輪投げ、スポーツ吹き矢、ダーツ、ディスクゴルフなど、子どもたちにとっての身近なあそびを起源としているものがあります。

スポーツテンカ <http://sportstenka.com/>



空間とあそび

第二次世界大戦後、子どもたちをとりまく社会環境は、大きく変化しました。その中でも「空間」の変容は、あそびにとって大きな影響を与えました。とりわけ、「投げる」あそびにとっては、空間の消失は致命的でした。

釘差しは、軟らかな土の地面がないと、うまく刺さらずにあそびが成立しません。雨が降るとぬかるむからと言って整地されすぎると、そこでは釘差しができなくなりました。どこにとんでいくかわからない、なかなか戻ってこないブーメランは、どこにとんで行ってもかまわないような広い空間がないと、とんでもない事態を引き起こします。驚くほどバリエーションに富んだ「てんか」の中には、最初にボールを投げ上げるのではなく、片流れの屋根にボールを投げ、落ちてきたボールを誰かがキャッチしてからスタート、というバージョンのものもありましたが、いつのまにかこの分譲地にも箱型の同じような形をした家が増えて、登ったりボールを乗せたりする大きな屋根は見だらなくなりました。

それでもただに、あそびやあそび場を見つけたしている子どもたちはどこにでもいます。車の来ない路地で「てんか」や三角ベースをしている子どもたちは、アスファルトに円をかくことができなくても、マンホールのふたを利用してしっかり遊んでいます。